

# 検証・浦和電車区事件の真実 No.25

民主化闘争情報 [号外] 2008年6月18日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

## 第25回 逃げられるほど世の中甘くないよ！

Y氏(当該事件被害者)への糾弾行為は、Y氏のJR東労組脱退後も続いた。2001年3月11日、Y氏は午後から泊まり勤務に就いたが、この日は山田被告からの脅しを受けた。

### おまえが乗務していると安全が保てない！

3月11日、Y氏は運転する電車の乗り継ぎの間、18時頃から約50分間の時間があったため、南浦和駅ホーム上にある「北行(ほっこう)方休憩室」に入った。この休憩室を利用する乗務員は少ないことから、Y氏は、(自分を脅す)東労組の組合員と遭遇する危険性は低いと考えていた(No.12を参照)。しかし休憩室には、Y氏が来るのを予期していたかのように、山田被告が奥の椅子に一人で座っていた。Y氏は「しまった、また脅される」と思ったが、すぐに立ち去るわけにもいかず、入口の近くに座った。暫くすると、示し合わせていたかのように、小黒被告と斉藤被告が続いて入ってきて、Y氏を睨みつけるように立った。Y氏はいよいよ逃げ場を失ってしまった。

山田は、「コソコソするんじゃねえよ!」「こうなるって分かってたんだろう、居づらくなるってことは。要するに逃げられない」「みんなおまえとは一切口きかないよ、金輪際!」「おまえが乗務していると安全が保てない。みんなが不安がっている」「組合辞めたからってそれだけでは済まねえんだよ、責任取れよ!」「みんなから逃げられるほど世の中甘くないよ!」などと、恫喝を繰り返した。精神的に打ちひしがれていたY氏は、反論する気力もなく、ただ黙って聞いているしかなかった。途中から加勢した小黒は、「区長のところへ行ってきたか、大澗さんが気にしていたぞ」と、7日の話を蒸し返して言った(No.23を参照)。暫くして、彼らの運転する電車の乗務時間になったため、この日の脅しは終わった。

すでに安全運転の自信も喪失していたY氏は、東労組役員らの恫喝が止まないことを悟り、「これ以上運転はできない」と観念した。勤務は翌12日の9時過ぎまでだったが、動揺を抑えて運転を続け、無事故で乗務を終えた。Y氏は、前日の脅しを受け、「いくら慰留されても、運転はこれで最後にしよう」と心に決めていた。南浦和の車両基地で電車を止めた時、「もう二度とハンドルを握ることはないのか...」と無念さがこみ上げてきた。その決意通り、Y氏の電車運転士の仕事は、結果的に、これが最後となったのである。

### ロッカー室で大澗被告が待ち構える

12日9時半過ぎに勤務を終えたY氏は疲れ果てていたが、昨日の小黒被告の言葉を思い出し、「大澗に会えばまた脅される」と怖くなって、すぐに彼の勤務を確認した。大澗は11時の出勤だったので、Y氏は、「まだ大丈夫だろう」と安堵し、急いで浦和電車区2階のロッカー室に向かった。しかし、そこには、Y氏の予想に反して、大澗が待ち構えていたのである。Y氏と大澗のロッカーは、運悪く、ロッカー室の奥側に並んでいた。(次号に続く)